

⑤ ゼロウェイストオフィスの創出に向けて

＜事例紹介 5＞

「ゼロウェイストオフィスの競争と共創
－ 資源循環のデジタルインフラ「pool」と、現場の実践から －」

レコテック株式会社

代表取締役 野崎 衛



ZERO WASTE OFFICE — CO-CREATION × COMPETITION

ゼロウェイストオフィスの 競争と共創

― 資源循環のデジタルインフラ「pool」と、現場の実践から ―

RECOTECH

2026.08.06 ・ レコテック株式会社 代表取締役 野崎 衛

02 — CONTENTS

RECOTECH

本日お伝えしたいこと

01

課題の整理

オフィスの資源循環を阻むのは、「排出者責任の曖昧さ」と「オペレーションの煩雑さ」

02

共創と競争

基盤はエリアで共有し（共創）、共通のモノサシの上で行動を競わせる（競争）― 4つの事例から

03

これから

館内物流の再設計とインパクト定量評価

MISSION

世代間責任を、果たす。

世界の資源循環率は、**わずか6.9%**。残り**93%**の資源は、一度使われただけで、ごみとして焼却・埋立されている。

RECOTECH は、資源循環のデジタルインフラをつくる Resource Tech スタートアップ。ごみを資源に変える、新たな経済圏を構築する。

Source: Circularity Gap Report

20年以上、変わらなかった。

資源循環が回らない理由は、排出・回収・調達それぞれのそれぞれにある。

01 排出 DISCHARGER

分けるより、燃やす方が安い。

分別のインセンティブが、価格構造として存在しない。現場に「分ける理由」がない。

02 回収 COLLECTOR

現場に行くまで、わからない。

何が、どれだけ出るか読めない。データがないまま走るから、積載効率は50%以下。

03 調達 PROCUREMENT

品質も量も、コストも読めない。

循環資源を、安定して仕入れられない。トレーサビリティも、供給量も担保できない。

排出・回収・調達 — 三者が、分断されている。

01
排出

Discharger

OUR APPROACH

02
回収

Collection

03
調達

Procurement

資源循環の、デジタルインフラ。

分断された 排出 / 回収 / 調達 を、ひとつのデータレイヤーで繋ぐ。
その実装が、プロダクト「pool」。

課題① 排出者責任が、曖昧。

オフィスビルでは、「誰が、ごみを減らす責任を持つのか」が曖昧なケースも。

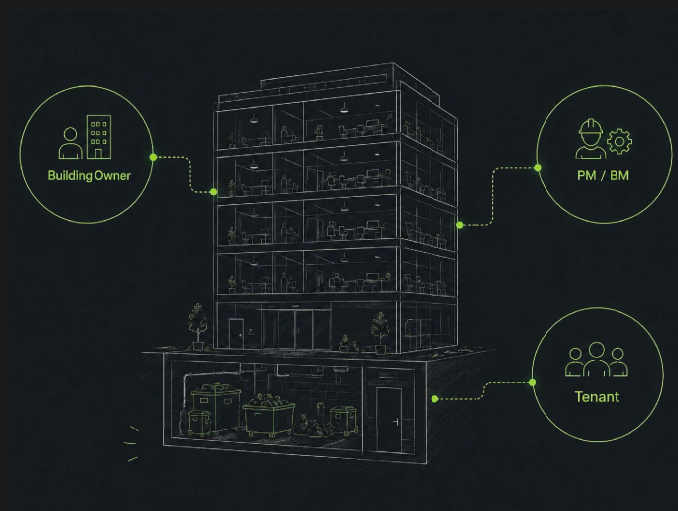
インセンティブが働かない

廃棄物処理費は共益費に吸収され、テナントは自分の排出量もコストも知らない。減らしても、得をしない。

割り当てるデータがない

責任を明確にしようにも、テナント別の実測データが存在しない。「誰がどれだけ出したか」を誰も言えない。

責任の明確化は、「計測」から始まる。



課題② 責任を明確にすると、オペレーションが増える。

排出者責任を明確にする — その瞬間、現場には新しいオペレーションが一気に発生する。

01

テナントごとの計量・登録

排出のたびに、誰の・何の・何kgかを記録する。

02

従量課金・請求・マニフェスト

テナント別の請求と、個別のマニフェスト発行・管理。

03

集計・分析・報告

分散したデータを集め、経営・認証・行政報告の形に整える。

04

ステークホルダーとの対話

オーナー・テナント・ベンダー間の調整とコミュニケーション。

オフィスビルでは、清掃員も巻き込んだデータの取得・提出が必要になる。

収集運搬も、清掃も、人手不足。効率化なしに、この運用は回らない。

共創と競争、 ふたつの原理で解決する。

CO-CREATION

共創 — 基盤は、共有する。

データ基盤と回収インフラをエリアで共有し、一者では負えないコストと手間を下げる。

COMPETITION

競争 — 行動は、競わせる。

共通のモノサシの上で排出を見える化し、比較とインセンティブで分別行動を変える。

共創 エリア単位で、可視化する。

1棟ずつではなく、エリアでデータを揃える — それがpoolの設計思想。価値はふたつ。



01 回収の効率化

エリアの排出データが揃うと、回収ルート最適化・積載率の向上・共同回収の余地が見える。収集運搬の人手不足に、直接効く。

02 データの標準化

物件・ベンダーごとにバラバラだった記録が、エリア共通のモノサシになる。— このモノサシが、後半「競争」の土台になる。

→ 行政スケールと民間ポートフォリオ、両方で実装が始まっている。

共創・事例① 横浜市

横浜市が管轄する区役所・学校・消防署をはじめとする様々な施設に導入が決定。

横浜市の収集運搬を担う事業者もpoolの活用が前提となり、リアルタイムの廃棄データを基にした回収ルートの最適化・廃棄物管理インフラとして運用が開始。

2026年4月～

1,200拠点

本格稼働開始。

共創・事例② 日鉄興和不動産

オフィスビル数十物件の廃棄物データポートフォリオを横断して一元管理。
既存の請求書・帳票のまま、ベンダーに追加作業を求めずに標準化データへ統合し、ESGデータ開示・モニタリング体制を構築。



再利用計画書

サステナビリティレポート

廃棄量削減・リサイクル率のKPI管理・モニタリング

GRESB等の第3者認証に向けた帳票

「比較できるデータ」が、初めて揃った。— では、比較すると何が起きるか。→ 競争へ。

競争 見える化が、インセンティブを生む。

競争は、3つの粒度で起きる。

ビル間

標準化データによるベンチマーク。「えいや」だった目標設定に、根拠を与える。

→ 共創がつくったモノサシ

テナント間

従量課金 × ダッシュボードの自動フィードバックで、分別行動を競わせる。

→ 事例① 玉川高島屋 S-C

部署・社員間

個人の「捨てる」行動まで可視化し、日常のモチベーションに変える。

→ 事例② 日建設計



競争・事例① 玉川高島屋 S.C.

テナント間の競争 — 「分けるほど得」を設計する。

計る

340テナントをIC識別で個別計量。公平な従量課金と按分をデータで実現。

価格差をつける

可燃とリサイクル品目の処理単価に差 — 分別の経済的インセンティブを価格でつくる。

伝える - フィードバック

テナント別ダッシュボードが前月比・ランキングを自動フィードバック。分別啓発のPDCAが高速で回る。

自動化する

従量課金の請求も、テナント別マニフェスト発行もpoolが自動化。運営の工数は増えない。

管理工数削減

70%

国内外の視察

200名+

RECOTECH — 第2回 資源循環自治体フォーラム・2026.08.06

RECOTECH



13 / 18

RECOTECH

競争・事例② 日建設計（PYNT TOKYO）

部署・社員間の競争 — 分別を、一人ひとりの行動に。本社の共創スペース「PYNT」で、ごみ計量×ポイント連携の実証を開始（2026年7月～）。

01 計量

捨てる瞬間に、ごみを載せて計る。

02 認証

社員証（NFC）で、個人・部署に紐付け。

03 可視化

個人 → 部署 → フロアごとに排出量・種別をダッシュボードで比較。

04 インセンティブ

計量データにポイントを連携し、参加と継続を促す。

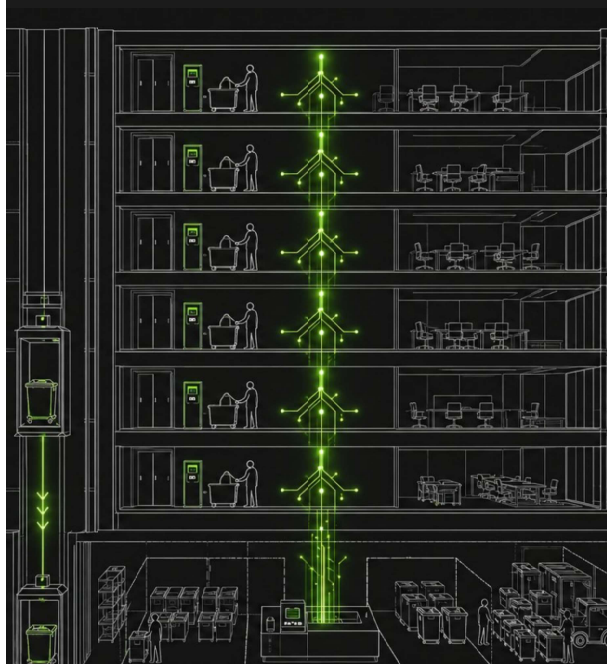
順位と比較が、日々の「捨てる方」を変える。
— 社内・従業員から始める競争のかたち。

「捨てる」動作に「計る」を挟む — 行動の単位まで、データが届く。



RECOTECH — 第2回 資源循環自治体フォーラム・2026.08.06

14 / 18



B1Fイメージ — 各階の排出物が、地下で品目別に集約される。

次の設計対象は、館内物流。

共創と競争が回り出すと、分別品目が増え、館内オペレーションはさらに複雑になる。
人手不足を前提に、パーティカルロジスティクスの検討を始めている。

実証中 各階はラベル発行のみ。計量は、地下に集約。

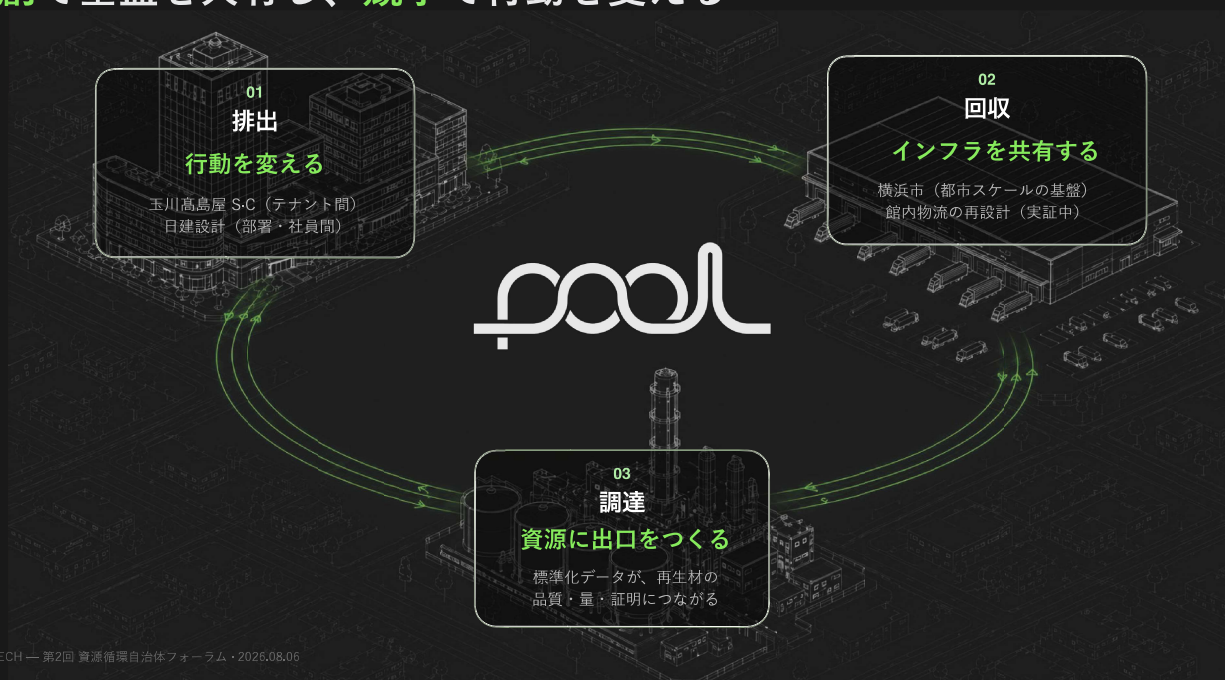
各階は省スペースの端末だけ。地下でQRを読んで1袋ずつ計量 — テナント別の実測が、省人で揃う。

開発検討中 滞留データが、館内回収の最適ルートを生む。

フロア別の滞留をライブ把握し、回収すべき階と最適な巡回経路を自動生成する。

少ない人手で回収が成立する、資源循環のための館内物流へ。

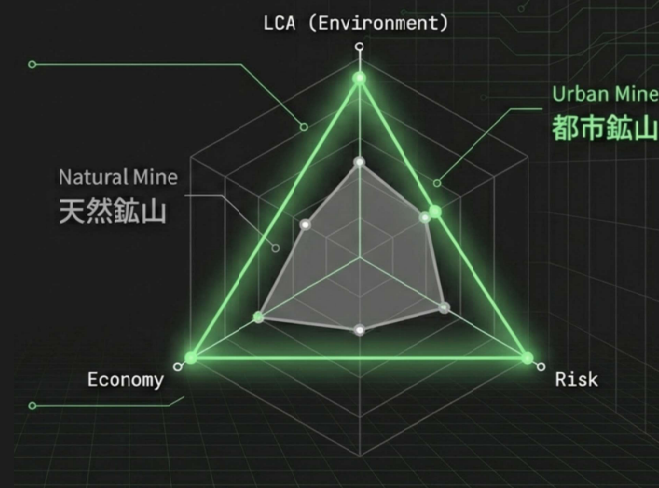
共創で基盤を共有し、競争で行動を変える



インパクトを、定量評価する。

廃棄物データの整備が、資源循環と経済性にどれだけのインパクトを与えるのか。
大学との共同研究として、実データによる検証を開始した。

「効果があるはず」から、「効果を示せる」へ。



大消費地を、 大供給地へ。

ブース出展中 — 2階ホールにて、お待ちしております。